病院薬剤師編

# 病棟常駐の拡大が焦点に

病院薬剤師の業務範囲は年々広がり、その内容も高度化してきた。近年は、各病棟におけるチーム医療の一員として、薬剤師がいかに役割を発揮するかに関心が集まっている。実際、薬剤師が病棟に常駐し、医師と共に個々の患者に適した薬物療法を考えたり、一部の処方設計を医師から任されたりする病院も各地にある。これら業務を全国に広げ、薬剤師として当たり前の業務に定着させることが今後の課題だ。

1990 年代に本格化した医薬分業の進展に伴い、外来患者の調剤業務は病院薬剤師の手を離れた。診療報酬の後押しもあって、病院薬剤師が病棟に出て業務を行う機会が次第に増えた。

当初は、ベッドサイドでの服薬指導が病棟での主軸業務だった。現在でもそれは柱の 1 つだが、ほかにも持参薬管理、一般注射薬の混合調製などへと業務範囲は広がってきた。

最近はさらに、患者個々に応じ最適な薬物療法の構築に、薬剤師がいかに関わっていくかが注目されている。その一例として、患者の持参薬をベースに入院後の基本的な処方を薬剤師が設計し、医師に提案する病院が存在する。不眠、嘔吐、便秘・下痢、緩和ケアなどの領域の処方設計を、医師が薬剤師に委託している病院もある。

医師はメインとなる疾患の治療には当然力を尽くすが、多忙なために、専門外の領域や周辺領域には十分に手が回りにくい。そこを薬剤師がカバーすれば、お互いにとって良好な関係を築くことができる。

このほか、薬剤師が聴診器を使って患者の腸の動きや呼吸音を評価するなど、様々な観点からフィジカルアセスメントを行って、薬の有効性や安全性を評価する取り組みも各病院に広がってきた。

10 年 4 月に発出された厚生労働省医政局長通知「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」では、現行法下でも病院薬剤師がチームの中で様々な役割を担えることが示された。薬物療法への積極的な薬剤師の参画を促したものだ。この通知をもとに、院内での薬剤師の業務拡充に取り組む病院が出てきている。今後、さらに増えそうだ。

こうした業務を展開するには、病棟での薬剤師の常駐が必要。それには十分なマンパワーの確保が欠かせない。そのために必要な財源が、12 年春の診療報酬改定でどこまで手当てされるのか、注目される。

業務の高度化を背景に、日本病院薬剤師会や各学会が主体となってがん、感染制御、精神科など様々な領域で、専門薬剤師、認定薬剤師制度を形作っている。最近は、日本医療薬学会が「薬物療法専門薬剤師、同指導薬剤師」制度を早ければ 12 年度から開始、スーパージェネラリストを育成すると発表し、話題になった。

---

先輩からのメッセージ

薬の情報を収集・発信

# 院内のコーディネート役

東京医科大学病院薬剤部

**瀬崎　史穂さん**

**鮎原　秀明さん**

東京医科大学病院薬剤部に勤める瀬崎史穂さん、鮎原秀明さんは共に東京薬科大学の出身だ。瀬崎さんは 2007 年に学部を卒業、鮎原さんは 06 年に修士課程を卒業し、同院に勤務した。現在は医薬品情報室（ＤＩ室）で薬に関する情報の収集・発信のほか、情報のコーディネーター役として活躍する毎日だ。

患者に近いベッドサイドの仕事がしたかったという鮎原さんは、学部時代から病院薬剤師を志望。薬局薬剤師志望だったという瀬崎さんは、より幅広い業務を経験できることから病院薬剤師の道を選んだ。

同院では採用後まず、調剤室、製剤室、注射薬全般を受け持つ薬務、外来化学療法センターなど病院薬剤師としての基本的業務を経験する。その後、瀬崎さんはＤＩ室に配属されて 1 年半、鮎原さんは病棟勤務を 4 年ほど経験して最近、ＤＩ室勤務となった。

ＤＩ室での業務は、医師や看護師、薬剤師からの問い合わせに対応することに加え、薬事委員会の資料作り、添付文書改訂情報などを掲載した薬事ニュースの発行と、院内の薬に関する情報を一手に担う。

仕事の魅力について瀬崎さんは「ＤＩの仕事は直接、医師や患者さんと顔を合わせる機会が少ないので目立たないかもしれないが、他の部署や職種が仕事を円滑に進められるようにサポートする重要な仕事」と話す。

鮎原さんも「当院は診療科ごとに病棟が分かれて、薬剤師が 1 人ずついる。各病棟の薬剤師にはそれぞれ強い分野があり、その知識を必要なところに橋渡しするのも重要な役割。必ずしも自分が回答しなくても、薬剤部全体としてベストの回答ができればいい」とし、院内の情報をコーディネートする機能も重要とする。

日々、やりがいを感じて業務に励む 2 人に、今後の抱負を聞いた。「もっと患者をきちんと見られる薬剤師になりたい」と鮎原さん。「病棟を経験して、ある程度仕事にも慣れたと思ったが、医師からの質問に添付文書の範囲内だけで答えている自分がいた。近ごろバイタルサインなどがよくいわれるが、全てのバイタルを見る必要はなくても、ある程度の理解は必要。患者を見れば見るほど、薬だけからいくことの危うさを感じる。バイタルなども含め患者をより深く見て、そこから薬のことにまで到達したい」と抱負を語った。

瀬崎さんは「問い合わせを受ける中で、自分の知識不足を痛感する。専門性も大事だがまず、幅広く知識を持つ薬剤師を目指したい」とジェネラリストとしての薬剤師を目指すとした。

FALCO SD

**臨床検査にて培った**
**医療機関とのネットワークを通じて**
**調剤薬局事業を展開しています。**

薬剤師の育成を第一に考え、充実した教育研修制度を構築するとともに、
最新の調剤過誤防止システムや電子薬歴管理システムを導入するなど、
IT 化を積極推進し、社員にとって働きやすい職場環境を整備しています。
医師、患者様はじめ地域の皆様から高い信頼と満足度を得る、
地域の「かかりつけ薬局」として展開しています。

ファルコ SD ホールディングスグループ
株式会社 ファルコファーマシーズ
本社／〒604-0911 京都市中京区河原町通二条上る清水町 346 番地　TEL (075)213-1621　FAX (075)213-1653　http://www.falco-pharm.co.jp/